

戦前の小学校国語教科書を用いた「言語文化」授業の実践

兵庫県立三木北高等学校 名生 修子

はじめに

本年度より実施された「言語文化」において、授業の一つの試みとして私が実践したことを、六十歳の定年退職を前に若い方々に反面教師という意味も含めてご呈示できればと思います、執筆を決定した。なお、執筆にあたり、数研出版『言語文化』及び、数研出版『九訂版 読解をたいせつにする 体系古典文法』を参考テキストとした。ある日

三年前に体調を崩して救急搬送されて以来、身体メンテナンスが必要になり、週に一度鍼灸院に通っている。たいていは平日の夜だが、その週は仕事が長引いて閉院時間に間に合わなかった。そこで、土曜日に鍼灸院に出かけることになるのだが、それが「言語文化」の授業に反映しようとは、神のみぞ知るであった。

施術後に繁華街に出かけた。日中に施術が終わる土曜日ならではの。ある古書店の入口近くの、未整理かと思わせる、紐で括られた古書の中に、戦前の修身の教科書を見つけた。「キグチコヘイハ、イサマシク イクサ ニ デ

マシタ。 テキ ノ タマ ニ アタリマシタ ガ、 シンデ モ、 ラッパ ヲ クチカラ ハナ シマセンデシタ。」あの有名な一節が載っている。見つけた修身教科書の下にもう一冊の本を見つけた。昭和七年発行『尋常科用 小學國語讀本 本卷一 文部省』。「サイタ サイタ サクラ ガ サイタ」で始まっている、あの有名な教科書だ。分ち書きではあるが、文節で区切っているのではないことがわかる。

「ススメ ススメ ヘイタイ ススメ」これも有名な一節。どんどん読み進め、あるページで目がとまる。歴史的仮名遣いの登場だ。授業で使えるかもしれない。修身教科書と共に、購入を即決した。うれしいことに歌川国芳の弟子・芳虎の浮世絵「稲本楼 小稲」も廉価で見つけた。

教科書『言語文化』

「言語文化」の教科書では、私たちが日常使用する「日本語」という言語の成立背景やその成立経緯を繙くところから始まっており、それは、漢文教材にもあてはまる。まさに新学習指導要領の〈2 内容「知識及び技能」〉(2)ウ、

エ、オを著実に実行するためのテキストだと言える。

『言語文化』最初の授業

「言語文化」の最初の授業は、国語の変遷の説明から始まった。教科書は、「日本人が残した最初の記録は、中国大陸から伝わった文字(漢字)をそのまま漢文(中国語)で記載していた。」と説明している。それから万葉仮名、ひらがな、カタカナの成り立ちの説明になり、公の文書は全て漢文で書かれていたなどの説明と、男文字、女文字の説明に移っている。そして、「変体仮名は近代になって学校教育の場から姿を消したが、昭和の戦前期までは一般に使われつづけていた。」と説明している。

戦前期の国語教科書

そこで生徒には、「これが戦前期、九十年前の小学校一年生の教科書ですよ。」と言って、現物を見せる(図1)。授業の最初からずつと下を向いていた生徒も、興味津々である。最初に「サイタ サイタ サクラ ガ サイタ」で始まっていること、途中に「ススメ ススメ

シタ。」で始まっている。「ここにも、歴史的仮名遣いが入っていますね。一ページ目の一行目、何か気づきませんか。」「オヂイサンの〈ジ〉が〈チ〉に点々。」「そうですね。」「二ページ目には歴史的仮名遣いは無いことを確認し、三ページ目に移る。ここには、「(オバアサン ハ) カヘリマシタ。」「オヂイサン ガ、山 カラ カヘツテ」など語中語末のハ行音が登場する。これも、文脈から容易に「ワ行音」で読める。以下、一ページごとに生徒に歴史的仮名遣いを指摘させて授業を進める。以下に、「桃太郎」に登場する歴史的仮名遣いを重複分は割愛して紹介する。

- 「モモ ヲ キラウ ト」 a
- 「中 カラ 大キナ ヲトコノコ ガ」 b
- 「ウマレタ ト イフ ノデ、モモタラウ」 c・a
- 「オニタイヂ」 d
- 「キビダンゴ ヲ コシラヘテ」 e
- 「ト マウシマシタ。」 a
- 「ムカフ カラ 犬 ガ」 c
- 「オトモ シマセウ。」 f
- 「シロ ヲ マモツテ 中マシタ。」 b
- 「テキ ノ ヤウス ヲ」 a
- 「中 ヘ ハイリマシタ。 サウシテ」 a (*)
- 「トビマハツテ」 e
- 「タイシヤウ ニ ムカヒマシタ。」 a・e
- 「イッシヤウケンメイ」 a
- 「タタカヒマシタ。」 e
- 「カウサン」 a

「ツナ ヲ ヒキマス」(*)
「カケゴエ イサマシク」 b

各語の下に記載したアルファベットは、読み方の法則別に a から h まで符号を付けて分類したものである。

生徒の発表した表記を、黒板を使って項目ごとに分類してゆく。「読み方の法則がわかりますか？」

〈タラウサン〉〈ガツカウ〉で、すでに項目 a は確認できているので、他の項目に注意を向けさせる。すると、項目 f が浮かび上がる。

項目 b についても、既に〈タラウサン〉の単元で確認はできている。項目 c は少し違和感があるものの、生徒は前後の文脈からすんなりと読めてしまう。項目 d も違和感はない。あとは項目 e である。

続々とハ行音のワ行音発音が指摘される一方で、生徒たちは(*)を付けた「ハイリマシタ」「ツナ ヲ ヒキマス」などの語頭の「ハ」や「ヒ」は、そのまま「ハ」「ヒ」と発音していた。

「桃太郎」の中から a、b、c、d、e、f と六種類の歴史的仮名遣いの読み方の法則が見つかった。

これらを、数研出版『丸訂版 読解をたいせつにする 体系古典文法』の、「歴史的仮名遣いの読み方」に照合してみた。それぞれの項目最後のアルファベットが「桃太郎」に登場した歴

史的仮名遣いの分類である。

- 1 語中語末のハ行音は、それぞれ(わいうえお)と発音する。 e
- 2 ワ行音の「ゑゑを」は、それぞれ「イエオ」と発音する。 b
- 3 母音が連続するとき、長音になる。

- ① 〈AU〉 ↓ 〈O〉 a
- ② 〈IU〉 ↓ 〈YU〉
- ③ 〈EU〉 ↓ 〈YO〉 f
- ④ 〈OU〉 ↓ 〈O〉

4 母音に「ふ」が続くとき、1と3の原則が働いて長音になる。 c

5 助動詞「む」「らむ」「けむ」、助詞「なむ」などの「む」は、「ん」と発音する。

6 「ぢ」「づ」「くわ」「ぐわ」は、それぞれ(ジ・ズ・カ・ガ)と発音する。 d

項目番号で整理すると、5のみが、「桃太郎」に登場していない。しかしそれは当然。昭和七年の教科書は、仮名遣いは歴史的でも、文法は既に現代文法になっているからである。

項目番号3の②④については、「桃太郎」には出てこないが、現代文でも同じように発音するというだけで、生徒はすんなりと納得する。これで、全ての「歴史的仮名遣いの読み方」を確認できたことになる。

語中語末のハヒフヘホ

まだ古文に慣れていない生徒は、単語の区切りがわからない。「語中語末のハ行」と言われ

ても、語中語末そのものがわからないのだ。

ところが、戦前の小学校教科書を使用すると、生徒は単語の区切りを容易に認識できるので、無意識に法則を適用しながら読むことができる。それによって、自分たちでその法則に（気づく）こともできるのだ。

そしてこの、「語中語末のハ行音は、（わいうえお）と発音する。」という項目には、おまけを付け足した。

ポーッと生きて…ないよ

「なぜ、昔の日本語の発音はこのように表記と違っているのだろうか。」という問を生徒に投げかける。皆、なすすべがない。

そこで、タイムリーにNHK総合TVで放映された「チコちゃんに叱られる！」の「『私は』と書いてなぜ『私わ』と読むのか。」というシーンを抜粋して生徒に見せる。所要時間は十分弱。日本語の発音の変遷について、外国人タレントが、要所所に「Why Japanese people? おかしいだろう!!!」と突っ込みを入れ、そのたびに国立国語研究所の小木曾智信教授が「案だからです。」と同じ回答をしながら、『日本書紀』やポルトガル語の文書を例に、表記と併せて「は」行の発音の変遷を示す内容になっている。期せずして、最初の授業で文字の変遷を扱った内容の裏付けにもなっており、生徒は画面に集中していた。

そしていよいよ、『私は』と書いてなぜ『私

わ』と読むのか。教授の「政府がそう決めたからです。」という回答の後「こちらは、戦前に使われていた国語教科書。」とアナウンスが流れ、授業で使った教科書が映し出される。TVの隣で私とその本物を手に持つ。TV画像と眼前の現実の一致。生徒のニヤツとした顔。

TVは続ける。「実は戦前まで、『おの(斧)』なのに、『をの』、『どうでしよう』なのに『どうでせう』など発音通りに文字を書いています。ここは本来、視聴者に意外性を感じてもらおう展開の筈のだが、「そんなこと、私たち、知っています。」と言わんばかりの生徒の得意顔。

教科書最初の教材

ちなみにこの後、教科書最初の教材「兎のそら寝」を使って、やはり歴史的仮名遣いを指摘させたところ、語中語末のハ行音の中で「かいもちひ」の「ひ」を指摘できない生徒が散見された。脚注には「かいもちひ」ぼたもちのこと」とあるが、脚注まで目が届かない生徒は単語の切れ目が認識できないため、指摘が難しかったのだろう。

逆に、戦前の教科書を使ったことについては、「仮名遣いをなおすのがおもしろかった。」と言っていた生徒は多く、授業を楽しめた様子であった。また、「昭和初期までこれが使われていたことに驚き。」「戦前の教科書は、どこを見ても興味深い。」など新たに知り得たことに対す

る興味や感動を洩らす生徒も多かった。

「言語文化」の教科書で、最初の教材を分かち書きしているものは、ほんの僅か。語中語末のハ行音については、歴史的仮名遣いを抵抗なく指摘させようとすると、特に教科書最初の教材は、単語での分かち書きを検討してもよいのかもしれない。

猫も歩けば

私はTV番組は必要なもののみ録画予約して見ることにしている。今回の「チコちゃん」も、大好きな猫の習性を扱うから録画しただけで、国語のことは全くノーマークだった。それがまさかの教材に。まさに、「犬も歩けば棒に当たる」、いや、「猫も歩けば授業に当たる」というところか。

神様のお陰

今回、土曜日に鍼灸院に行った偶然から「チコちゃん」まで、私はクリスチャンではないが、神様が導いてくださっているとしか思えないような展開であった。でも、こういうことは多い。このように、思いがけないところで思いがけないことが授業に繋がるといいうことも、若い先生方にご呈示できればと思ひ、僭越ながら紹介させていただいた。

これを書いている足下で今、猫がご飯を待っている。芳虎の浮世絵がそれを見下ろしている。